

「エチカ」ゼミ 第10回レジュメ

2022年1月7日 大谷隆

0 範囲

第二部 定理四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九

1 「人間」と「幸福」のために

第Ⅱ部「精神の本性および起源について」もいよいよ最後となる。第Ⅰ部「神について」から読み進めてくことでスピノザの人物像が浮かび上がってきたように感じる。

第Ⅰ部は、完全で無限、全てというものの自体である「神」についての記述だった。この世界は極めて論理的に整合したもので、どこか幼稚さすら感じる理屈っぽさを世界の果てまで到達させている。まさに「完全」「無限」「全て」そのものを体系的に定義づけて語彙を再現し、ときに新たな語彙を生み出しつつ記述していく。これ自体、当時の宗教的常識の中では相当に高度な抽象力を必要とするもので、仮に第Ⅰ部だけしか書かれなかったとしても一定の評価は得たように思う。しかしそれだけでは「エチカ(倫理学)」とは命名できなかっただろう。

スピノザは、第Ⅱ部(以降)で、この完全な神の記述世界に対して、「人間」を記述していく。これは、「完全」「無限」「無謬」の世界に文字通り「不完全」「有限」「誤謬」を記述していくことそのものとなっている。これによって「倫理学」としての面を備えることになる。スピノザは簡潔に第Ⅱ部冒頭に、

人間精神とその最高の幸福との認識へ我々をいわば手を執って導きうるもの

を記すと宣言してこれを始める。「人間精神」とその「最高の幸福」を記述する。

2 「虚偽(誤謬)」と「自由」

スピノザが「人間精神」を記述するために必要としたのが「虚偽(誤謬)」である。「全て」を、つまり「無限」に認識する神とは異なり、「人間」は「有限」の認識しか持たない。「人間」は限られた認識の中にいる。「有限」である以上、「全て」に対して部分的に欠落した認識しか持てない。よって「混乱」している。

定理二八

人間身体の変状の観念は、単に人間精神に関連している限り、明瞭判然たるものではなく、混乱したものである。

定理二九 系

したがって精神は、そうした観念を有する限りは、自分自身についても(この部の定理二九により)、自分の身体についても(この部の定理二七により)、外部の物体についても(この部の定理

二五により)、妥当な認識を有せず、単に(この部の定理二八ならびにその備考により)毀損し・混乱した認識を有するのみである。

「人間精神」の認識は、自分自身についても、自分の身体についても、外部の物体についても(要するに『神』について)以外はということか?)「非妥当」な認識であり「虚偽」「誤謬」である。

定理三五

虚偽〔誤謬〕とは非妥当なあるいは毀損し・混乱した観念が含む認識の欠乏に存する。

こうして「誤謬」が導かれる。この「誤謬」の概念は「人間」や「個人」を記述するためには、必要不可欠なものである。このプロセスの裏側で同時進行的に、僕たちが人間や個人を意味づけるために前提していた重要な概念が必然的に揺さぶられる。

定理三五 備考

例えば人間が自らを自由であると思っているのは、(すなわち彼らか自分は自由意志をもってあることをなしあるいはなさざることができると思っているのは、)誤っている。そしてそうした誤った意見は、彼らがただ彼らの行動は意識するが彼らをそれへ決定する諸原因はこれを知らないということにのみ存するのである。だから彼らの自由の観念なるものは彼らが自らの行動の原因を知らないということにあるのである。なぜなら、彼らが、人間の行動は意志を原因とすると言ったところで、それは単なる言葉であって、その言葉について彼らは何の理解も有しないのである。すなわち意志とは何であるか、また意志がいかんして身体を動かすかを彼らは誰も知らないのである。

揺さぶられたのは「自由意志」だ。神はすべてを知っているが人間は限定的にしか知らない。全てを知っていれば、自分が自分の意志で行動しているわけではなく、自分の行動とされているものも別の個物からの刺激による変状に過ぎない。そしてその個物も別の個物からの刺激を受け・・・、という無限連鎖にある。この無限の連鎖、相互に刺激合っているネットワークが「自然の秩序」である。つまり「人間」の認識が有限であるがゆえに、自分の自由意志で物事を開始したのだと「誤謬」する。ほんとうはただ「自然の秩序」に従っているだけだ。つまり「人間」は「誤謬」があり「混乱」しているがゆえに「自由意志」があると誤認している。

このスピノザの人間観はここだけを見ると、のちの行動主義心理学に似ている。

行動主義(英: behaviorism)は、心理学のアプローチの1つで、内的・心的状態に依拠せずとも科学的に行動を研究できるという主張である。行動主義は、唯物論・機械論の一形態であると考えられ、あたかもブラックボックスのような外からは観察ができない心が単独で存在することを認めていない。多くの行動主義者に共通する1つの仮説は、「自由意志は錯覚であり、行動は遺伝と環境の両因子の組み合わせによって決定されていく」というものである。(ウィキペディア「行動主義心理学」)

「人間は環境と遺伝に従って機械的に反応しているだけだ」というもので、この部分に関してはスピノザの人間観と合致する。しかし、スピノザと行動主義には重大な違いがある。どのように異なるかの説明は後ほど行うが、その違いの源泉は、スピノザが「最高の幸福」を志向していることであり、そこに人間性を見ていることだ。本書が「倫理学」である必然性自体によって、スピノザの思想は機械的な人間論から逸脱しているように思う。

第Ⅰ部と第Ⅱ部を、ここまで地道に読んできた人間であれば大きくは外れない記述で簡単にまとめると、

- 1 【第Ⅰ部】神は全てである。
- 2 【第Ⅰ部】神以外はない。
- 3 【第Ⅰ部】神は無限である。
- 4 その完全な世界に人間はいる。にもかかわらず、多くの人間は誤った行動をしている。
- 5 【第Ⅱ部序文】なぜ誤るのか。どうすれば人間精神は誤らない方向へ、つまり「幸福」になれるか。
- 6 【第Ⅱ部】人間精神は有限である。
- 7 【第Ⅱ部】有限な認識しかないので混乱している。
- 8 【第Ⅱ部】混乱しているから人間精神は誤る。
- 9 【第Ⅱ部】完全なる神の認識に向かうことで「幸福」になる。

といった流れになる。4は明記されていない、おそらくは本書の動機にあたっているものだろう。

3 スピノザの人間観とスピノザの人物像

スピノザは自分の「頭の中にある」自己都合的かつ理想的な美しく非の打ち所のない機械的な理論体系を自慢気に披瀝しているのではなく、「人間の精神の最高の幸福」のためにこれを記している。本書の執筆や公表のために彼が支払った代償を考えれば、これは彼の真意だっただろうし、なによりも、第Ⅱ部を読みすすめることで、それ自体を僕は実感できる。賢さ自慢ぐらいで少なくともこの第Ⅱ部は書けない。そして本書は第Ⅴ部までである。

ところで、第Ⅰ部の「完全な」体系のなかに、第Ⅱ部で人間をまさに「不完全さ」「誤謬」そのものとして登場させ、その不完全な人間が完全なる神へと近づくことで「最高の幸福」へと導かれるというような方向性自体が、僕にはかなり「無理筋」だと感じるのだけれど、ここにスピノザの人物像と彼が置かれていた時代の思想、主にその当時の宗教的状況が現れているように思う。

スピノザが念頭に置いているだろうキリスト教に代表される既存宗教は、「幸福」という問題に対して、自己犠牲であったり、厳しい修行(苦行)であったりといった苦悩的代償を前提にしているようなところがある。こういった宗教的ムードは簡単に言えば、自分の自由意志で、自分を苦悩へと追い込むことを「幸福」に結びつけようとしている雰囲気があるように感じる。これに対して、スピノザの「幸福」への方向性は、開けた「明るさ」がある。極端に言えば「エチカ」を読み進むだけで、神の完全で無限の全てを理解し、「幸福」に近づくことになるといったような知的な明るさだ。少なくとも、僕は、スピノザの書いたことをそのとおりだと思える分だけ、自分の精神が寛容さを広げたような気になった。

このことは僕が「実際に」寛容になったかや「実際に」混乱なく誤りのない精神に近づけたかどうかを問わず、「そういう気になった」ということ自体で、とても重要だと思う。人間精神というものは、たぶん、そ

のぐらい、動揺しやすく、変状できるもので、つまり、僕がスピノザを読んだから僕の世界の見方が変わった気がするということそのものを、スピノザは「変状」「刺激」、つまりアフェクティオとして肯定している。これがスピノザの人間観なのだろう。この人間観は、人間を反応する機械に見立てた行動主義の持つ無機的な雰囲気とは全く異なるものだ。

スピノザを読むことで寛容さが増したり、生きることや考えること、知識を得ることなどによって「明るく」してくれる気分の源は、スピノザの思想の二つの「アフェクティオ」によって実現されている。

「アフェクティオ」を「神の変状」として「全ての存在」を包含している根拠にしつつ、同時に「存在するものの相互の刺激」として存在者間の相互影響による変化を許容する。柔らかい無限の絶対的包容力と柔軟な可変性を実現した思想になっている。

ー この説は、我々が神の命令のみによって行動し・神の本性を分有する者であること、そして我々の行動がより完全でありかつ我々がより多く神を認識するにつれていっそうそうなのであることを教えてくれる。ゆえにこの説は、心情をまったく安らかにしてくれることのほか、さらに、我々の最高の幸福ないし至福がどこに存するかを我々に教えてくれるという効果をもつ。すなわち我々の最高の幸福ないし至福は神に対する認識にのみ存するのであり、我々はこの認識によって、愛と道義心の命ずることのみをなすように導かれる。これからして～～徳そのもの、神への奉仕そのものがとりもなおさず幸福であり・最高の自由であることを知らずに、徳と善行を最も困難な奉仕とし、これに対して神から最高の報酬をもって表彰されようと期待する人々は、徳の真の評価からどんなに遠ざかっているかを、我々は明瞭に理解するのである。〔第Ⅱ部定理四九備考〕

「ゆえにこの説は、心情をまったく安らかにしてくれることのほか、さらに、我々の最高の幸福ないし至福がどこに存するかを我々に教えてくれるという効果をもつ」というわけだ。スピノザは本心から、自身の理屈を理解すれば人は幸福になると確信していたはずだし、その確信に基づいた彼の努力は的外れとは言えない。本書を読むことでその「刺激」を受けることができる。

4 スピノザの無理筋と筋の良さ

ここまで来て僕はようやく、スピノザの思想への現代的な応答ができるような気がする。本書のなかで僕を感じる「無理筋」を現時点での感想として記述する。

スピノザは第Ⅰ部で「神」を、第Ⅱ部で「人間」を記述した。「神」については、僕自身は実はそれほど違和感を感じない。ここにある違和感は各種の語彙の用い方、そのルールやルールの記載方法といったものが主で、究極的には「神」という名付け方自体となる。これを「神」ではなく、「法則」といったような言葉に置き換えれば、考え方自体はあり得るものだ。そして、それをここまで論理的に体系化して記述できたことに素直に感動できる。

この記述は、絶対的で超越的な視点で、「すべて」を主語とするような普遍的な記述になっている。その絶対的な唯一視点を引き継ぎつつ、スピノザは第Ⅱ部は「人間」の「幸福」を記述していく。ここにおいて、僕は、それは無理ではないかという気がしてくる。

簡単に言えば「幸福」を記述するのに、視点として、僕は「私」や「あなた」や「私達」を必要とするように思う。「私」や「あなた」や「彼」や「彼女」や「〇〇（個人名）」が必要で、それらの「視点（主体）」の重なり合いとして「幸福」は記述されるのではないかというものだ。言い換えれば、「幸福」を物語るには「私」「あなた」「彼」「彼女」「〇〇（個人名）」を主語にした重層的な記述が必要なのではないか。

スピノザも大きく影響受けたらうデカルトの「私」は、全てを疑い、「私がこのように“全ては偽である”と考えている間、その私自身はなにものかでなければならない」（ウィキペディア「デカルト」）として「私」を見出している。しかし、この超越的な「私（の意識）」が「幸福」を目指すにはこの構造、つまり「私」という純粋な意識と「それ以外」の対象物という構造だけではたどり着けないように思える。もしくは、神との合一をそれをもって「幸福」と見なせるのであれば、既存の宗教における「信仰」によっても、それは可能になることになるが、それこそが「自由意志による自己犠牲」という単一の方向性になるのではないか。

「神」という絶対的超越的な一点に向かおうという単一の方向性ではなく、現実存在する各個人、各個物との相互の錯綜した連携という複数の方向性が幸福というものを編み上げていくように僕には思える。「神」という絶対的超越的な存在と「幸福」とを直接結合させるのではなく、複数の「他人」というものとの相互「刺激」によって「私」が「幸福」な状況に「なる（変状する）」という記述のほうが、僕は「筋が通る」気がしている。だから、スピノザの無理筋は、実は、かなりいい線を行っていると思う。むしろ「筋が良い」とも言えるほどで、スピノザは、個々の人間は、その他の個物との相互影響（刺激）の中にあると知っている。この個物には現代的には「他人自身」として取り出せるものを含んでいる。もしも「全て」という超越的な消失点を「神」と名付けなければ、スピノザの人間像は十分に現代的にも通じうるほどの現実性を持っているように思える。

スピノザの「神」観は完全な決定論だが、人間観や人生観は、むしろ人間の未来は確定したものではなく、少なくとも「我々がより多く神を認識するにつれていっそうそうなのである」といったように、その方向へと「我々が」向かうことが可能だとしている。これはスピノザの語彙では「自由意志」ではないということになるが、とはいえ、なんらかの「意欲」的なものを含んでいる。「我々が」幸福になっていこうとすること自体を「意欲」と呼ぶこともできなくはない。この「意欲」を発揮していくときに、我々は「自分自身について」「他の個物について」の相互刺激の状態を変状させていくのだとしたら、それは「他人自身」を発見するギリギリのところまで迫っていた。

以上